

(続紙 1)

京都大学	博士（ 教育学 ）	氏名	井谷信彦
論文題目	存在論と「宙吊り」の教育学—ボルノウ教育学の再考を軸に—		
（論文内容の要旨） 本論文は、教育人間学の中心人物の一人ボルノウの教育学を、ハイデガーの存在論との関連から批判的に吟味し、そこから改めて世界と人間存在の奥行きを奥行きとして学び知り／教え伝える「存在論に立脚した教育学」：「宙吊りの教育学」の在り方を示そうとした論文である。 その論証のために、本論文は「第一部：ボルノウ教育学の再考—ハイデガー哲学との関係に注目して」と「第二部：存在論と『宙吊り』の教育学—ボルノウ教育学の再々考に向けて」の二部からなっている。この二部は、互いに合わせ鏡となるように周到に構成されており、第一部ではボルノウ教育学の問題点が、その思想形成に深い影響を与えたハイデガーの哲学思想と対質することを通して明らかにされる。それに対して第二部では、ハイデガーの存在論に立脚する教育学が「宙吊りの教育学」として示され、そこから翻ってボルノウ教育学が再吟味され、改めてボルノウ教育学の可能性が明らかにされる。 まず第一部では、「第一章：有用性の尺度に規定された方法論」において、ボルノウの「教育学における人間学的な考察方法」が論じられる。「人間学的な考察方法」の諸原理が結局のところ、有用性・機能性に規定された方法論であることが明らかにされる。それを受けて「第二章：生の危機と生の成熟」では、「生と教育の非連続的な形式」として提示されたボルノウの「危機」の探求が、第一章で明らかにした探求方法に規定されて、実存の不気味さに直面させる出来事でありながら、結局のところ道徳的・倫理的な観点から、「危機の機能」に関する理論へといたってしまうことが示される。同様に、「第三章：希望と不安の相互連関」では、ボルノウの「希望の哲学」が再考される。ボルノウは、ハイデガー哲学の「不安」の概念に対抗しつつ、「実存哲学」（ハイデガーの哲学を指している）克服の意図を込めて「希望」の哲学を構築したのだが、ここでもまた「希望」は有用性の尺度に規定された探求方法に規定されてることが明らかになる。さらに「第四章：「住まうこと」と世界の奥行き」においても、「実存哲学」克服を意図して展開されたボルノウの「被護性」の概念が、有用性と価値に収まらない生の事象を捉えようとしながら、結局のところ「有意義性の連関」に包摂されてしまうという問題を持っていることが明らかにされる。この二章・三章・四章はともに同形の論理構造でもって構成されており、「危機」「希望」「被護性」といった生の現象に関するボルノウの中心概念が、ボルノウの論述に沿いながら詳細に提示され、そのあとで関連するハイデガー哲学からその現象を吟味し直されることによって、それらの諸概念がすべて「有用性と意味」に回収されること、そのことによってその現象の由縁を立ち塞いでしまっていることが明らかにされる。さらにその考察結果からボルノウ教育学に内在する問題点（議論の錯綜した点）が追求されていく。			

(続紙 2)

このようにして、ボルノウ教育学がその根本原理とした、いかなる特定の世界観・人間観にも基づかないという「開かれた問いの原理」とは裏腹に、それ自体が問われることの無い「有用性と意味の連関」に基づいた教育学であることが明らかにされる。

第二部の「第五章：存在の真理と転回の思索」では、ハイデガーにおいて、『存在と時間』以前の「生の事実性」の探求から、現存在としての人間による意味理解を拠り所とする「存在の意味」の探求へ、さらに「存在の意味」の探求が存在を存在者のように客体として取り扱うことへの反省から、存在者の存在そのものが問いに付され「存在の真理」の探求へと深化する過程が丁寧に描かれ、有用性と価値の連関に還元できない人間存在の在り方が示される。「第六章：存在論に立脚した教育理論の来歴」では、この議論を承けて、これまでの存在論に立脚した教育学の試みが吟味にかけられる。そしてこれらの先行する試みが「有用性と価値の教育」への疑問から出発しながら、ボルノウ教育学と同様、結局のところ「有用性と価値」に基づいた教育学に回収されてしまい、いずれもこの問題を克服できなかった点が明らかにされる。このような先行研究の轍を踏まないために、「第七章：「知の宙吊り」という方法」では、ハイデガー哲学の探求内容にではなくむしろ探求方法に注目する道を選択する。さらに、ハイデガー自身が思索者であるとともに教師であったことに注意を促し、ハイデガー哲学の探求方法に基づいて、「知識／伝達あるいは学び知ること／教え伝えることの連関」を問い直し、そこから存在論に立脚する教育／教育学への示唆を受け取ろうとする。存在の問いの性格上、存在は対象化されてはならず、「存在の真理」は命題のように確固として明示的に差しだしたり伝達されたりできるものではない。そこから、「知の宙吊り」ともいうべき「形ばかりの告示」、「存在の真理」の空け開きへと没入する詩作者による予感／合図、そしてその詩作者からの合図の聞き手となる思索者の「宙吊りの知」としての予感／合図など、存在論の探求に固有の学び知ること／教え伝えることの特徴が明らかにされる。これを承けて、「第八章：宙吊りの教育学の構想」では、この「宙吊りの知」を探求方法とする「宙吊りの教育学」が構想される。そしてこの「宙吊りの教育学」から、改めてボルノウ教育学が「再々考」される。第一部においてボルノウ教育学の問題点として指摘された「議論の錯綜した点」をこそ、確固とした命題としてではなく、「宙吊りの知」として予感／合図が聞き届けられる現場として捉え直すことができ、「宙吊りの教育学」への突破口であることが明らかにされ、ボルノウ教育学の新たな可能性が示される。このようにして、本論文がたんにボルノウ教育学批判ではなく、むしろボルノウ教育学再興の試みであったことが明らかとなる。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、教育人間学の中心人物の一人であるボルノウの教育学を、ハイデガーの存在論との関連から批判的に吟味し、そこから改めて世界と人間存在の奥行きを奥行きとして学び知り／教え伝える「存在論に立脚した教育学」：「宙吊りの教育学」の在り方を示し、翻ってボルノウ教育学の可能性を明らかにした論文である。

まずボルノウ教育学研究として評価できる点をまず明らかにしたい。ボルノウの学問的業績の一つとして、実存哲学の成果を教育学に導き入れたことにあると言われてきた。また「実存哲学」(ハイデガー哲学)を克服する形で教育学を構築していると評価されてきた。このことについて著者は、ボルノウの「教育学における人間学的な考察方法」における探求方法論自体が、人間の諸事象を機能的に解釈するという方向に方向付けてしまったことで、「危機」や「希望」や「被護性」といったボルノウ教育学の中心概念を、いずれも人間存在の重要な局面を言い当ててはいるものの、ボルノウの意図を超えて、倫理学・道徳論を基盤とする「有用性と価値の連関」のもとに捉えてしまったことを、綿密なテキストの解説によって明らかにしている。さらにまた「実存哲学」の克服として理解されてきたボルノウ教育学であったが、ハイデガー自身の警告にもかかわらず、ボルノウは「本来的／非本来的」といった存在論の用語をはじめとしてハイデガーの思想を、道徳的・倫理的な観点から「有用性と価値の連関」のもとに理解しており、結局のところハイデガー哲学を十分に理解していない点を具体的に明らかにしている。これらの論考は、決して少なくはないこれまでのボルノウ教育学についての研究に位置づけても、画期的とも言うべき研究として高く評価することができるが、著者はさらに先に進んでいく。

本論文がさらに優れているのは、ハイデガー哲学を精査して、そこから「存在論に立脚した教育学」を構想したことである。とくに優れているのは、この論の組立て方である。著者は、存在論に立とうとしたこれまでの教育学の試みが結局のところ、すべてボルノウ教育学と同じく、「有用性の尺度と価値判断の基準に規定された教育／教育学」に他ならないことを明らかにした。そして先行研究の轍を踏まないために、ハイデガー哲学の探求内容にではなく探求方法に注目し、その探求方法に基づいて、「存在の真理」が「宙吊りの知」としてしか提示できないことを明らかにし、そこから存在論に立脚した教育学として「宙吊りの教育学」を構想した。ハイデガー哲学研究として、存在論の解釈内容自体が持つオリジナルな点もさることながら、この「存在論に立脚した教育学」を論述していくための理論的な手続きの周到さが評価できる。

またこの一連の論考のなかで、ハイデガー哲学を世界と人間存在の奥行きを奥行きとして学び知り／教え伝える「存在論に立脚した教育学」へと練り上げていることも、同様に高く評価できる。とくにその際、ハイデガーが思索者であっただけでなく、大学の教師として、ほかならぬ存在論について論じ教えていたことに着目し

(続紙 4)

たことも卓抜した点であった。そして「知の宙吊り」ともいうべき「形ばかりの告示」、「存在の真理」の空け開きへと没入する詩作者による予感／合図、そしてその詩作者からの合図の聞き手となる思索者の「宙吊りの知」としての予感／合図など、存在論の探求に固有の学び知ること／教え伝えることの特徴を明らかにし、このような形でハイデガーの存在論から教育・教育学への道筋を提示した点は、極めて独創的で評価に値する。

さらに「宙吊りの教育学」から、改めてボルノウ教育学を再吟味し、第一部でボルノウ教育学の問題点として指摘した「議論の錯綜した点」にこそ、「宙吊りの教育学」の突破口であることが明らかにし、ボルノウ教育学の新たな読みの可能性が示した点は、前述のボルノウ教育学批判の成果以上にボルノウ教育学研究として評価できるものと言える。

しかし、なにより特筆すべき優れた点は、本論文が極めて周到で綿密な構想の下で構成されていることにある。ボルノウ教育学をハイデガー哲学によって吟味した第一部と、ハイデガー哲学による存在論に立脚した教育学を論じた第二部とを、ちょうど合わせ鏡のようになるよう構成することで、ハイデガー哲学によって従来のボルノウ教育学の問題点を明らかにするだけでなく、さらにボルノウ教育学を手掛かりにすることで、新たな存在論に立脚する教育学の在り方を示すことができおり、そこにとどまらず、さらにはそのような存在論に立脚した教育学「宙吊りの教育学」から改めてボルノウ教育学の新たな可能性を示しさえするという、考え抜かれた論文構成となっている。ボルノウ教育学はハイデガー哲学との緊張関係のなかで誕生した。ハイデガー哲学の影響を強く受けていたボルノウ教育学にとって、ハイデガーの存在論は外在的なものではなく、ボルノウ教育学が形作られるなかで取り入れられてもいたのであり、そのため本論文の構成に見られるように、ダイナミックでありかつ繊細な議論を経ることで、ボルノウ教育学の内部から新たなボルノウ教育学の可能性を示すことに成功している点は、高く評価すべきである。

試問においていくつかの問題点が指摘された。従来の教育学の側から捉え直されたとき、存在論に立脚する教育学は、有用性と価値との連関を持たないで、教育学としてはたして成立するのだろうか、あるいは繊細に示された存在論の探求方法によって実際に教育は可能なのだろうか、といった問題点である。これらの指摘は重要である。しかしなによりこれらの問題点は、著者自身が課題として深く自覚しているところでもあり、本論文の価値をいささかも減じるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年2月4日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降